

PATENT ABSTRACTS OF JAPAN

(11)Publication number : 2002-112001

(43)Date of publication of application : 12.04.2002

(51)Int.Cl. H04N 1/387

G06T 3/00

G06T 3/60

H03M 7/30

H04N 1/41

H04N 7/30

(21)Application number : 2000-296469

(71)Applicant : SHARP CORP

(22)Date of filing : 28.09.2000

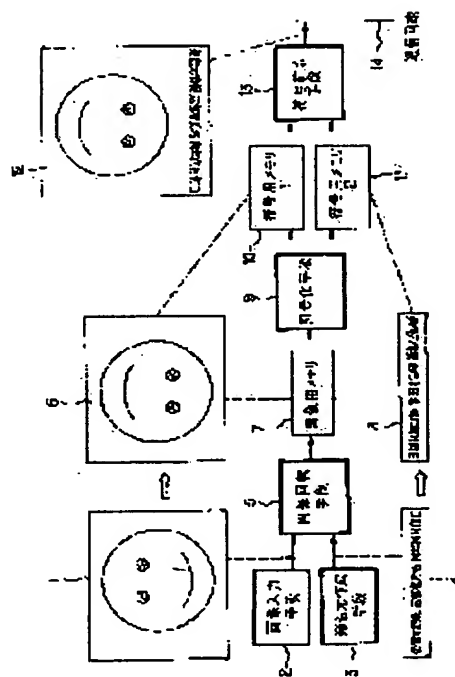
(72)Inventor : YAMADA HIDEAKI

(54) IMAGE ENCODING DEVICE

(57)Abstract:

PROBLEM TO BE SOLVED: To provide an image encoding device which is capable of improving encoding efficiency by restraining a restart marker from increasing when originating end information is added to the tip of an image.

SOLUTION: In a case in which an input image 1 and an originating end information image 4 which are separate from each other are combined into a single send image, when the originating end information image 4 of a small number of lines (small region) is arranged on the upper part of the send image, the input image 1 having a larger region than the originating end information image 4 is arranged below the originating end information image 4, the input image 1 and the originating end information image 4 are turned by an angle of 180 degrees respectively before they are encoded, and the input image 1 having a large region is encoded first through JPEG.



LEGAL STATUS

[Date of request for examination]	11.06.2002
[Date of sending the examiner's decision of rejection]	
[Kind of final disposal of application other than the examiner's decision of rejection or application converted registration]	
[Date of final disposal for application]	
[Patent number]	3614358
[Date of registration]	12.11.2004
[Number of appeal against examiner's decision of rejection]	
[Date of requesting appeal against examiner's decision of rejection]	
[Date of extinction of right]	

(19)日本国特許庁 (J P)

(12) 公開特許公報 (A)

(11)特許出願公開番号

特開2002-112001

(P2002-112001A)

(43)公開日 平成14年4月12日(2002.4.12)

(51)Int.Cl. ⁷	識別記号	F I	テームコード*(参考)
H 0 4 N 1/387		H 0 4 N 1/387	5 B 0 5 7
G 0 6 T 3/00	3 0 0	G 0 6 T 3/00	5 C 0 5 9
		3/60	5 C 0 7 6
H 0 3 M 7/30		H 0 3 M 7/30	Z 5 C 0 7 8
H 0 4 N 1/41		H 0 4 N 1/41	Z 5 J 0 6 4

審査請求 未請求 請求項の数 7 O L (全 12 頁) 最終頁に続く

(21)出願番号 特願2000-296469(P2000-296469)

(22)出願日 平成12年9月28日(2000.9.28)

(71)出願人 000005049

シャープ株式会社

大阪府大阪市阿倍野区長池町22番22号

(72)発明者 山田 英明

大阪府大阪市阿倍野区長池町22番22号 シ

ャープ株式会社内

(74)代理人 100112335

弁理士 藤本 英介

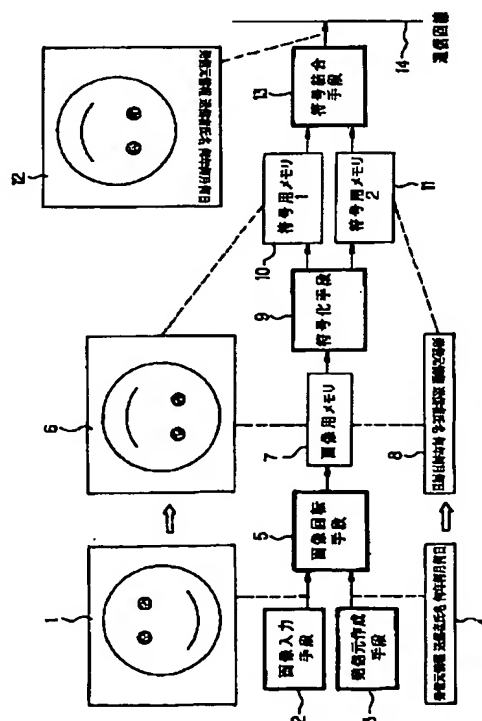
最終頁に続く

(54)【発明の名称】 画像符号化装置

(57)【要約】

【課題】 発信元情報を画像の先端に付加する場合に、リスタートマーカの増加を抑えて符号化効率を高めた画像符号化装置を提供すること。

【解決手段】 別個独立の入力画像1と発信元情報画像4とを組み込み、1の送信画像を形成する場合に、該送信画像の上方部に少ライン数(小さな領域)の発信元情報画像4を、その下方部に発信元情報画像4よりも大きな領域の入力画像1を配置する時には、入力画像1と発信元情報画像4とを符号化前に各々180度回転し、大きな領域の入力画像1側よりJ P E Gで符号化する。



(2)

1

【特許請求の範囲】

【請求項1】 第1の画像と、該第1の画像よりも小領域の第2の画像とを、各々符号化した後に結合して送信することで、1の送信画面上には第2の画像が第1の画像よりも上段側に配置する送信画像を送信する画像符号化装置であって、

前記第1の画像と第2の画像を各々略180°回転した第1の回転画像と第2の回転画像を出力する画像回転手段と、

前記第1の回転画像の大きさに基づく符号化ブロック単位で、前記第1の回転画像を符号化した第1の符号と、第2の回転画像を符号化した第2の符号と、を生成する符号化手段と、

前記第1の符号の後方に第2の符号を結合する符号結合手段と、を設けたことを特徴とする画像符号化装置。

【請求項2】 前記符号化手段は、符号化ブロック単位を示す識別符号の挿入間隔を、第1の回転画像の大きさに基づいて決定することを特徴とする請求項1記載の画像符号化装置。

【請求項3】 前記符号結合手段は、符号化ブロック単位を示す識別符号により第1の符号と第2の符号を結合することを特徴とする請求項1記載の画像符号化装置。

【請求項4】 前記符号化手段は、前記第1の回転画像の符号化時に、符号化ブロック単位を示す識別符号の後に前記第2の回転画像の符号で置き換えるためのダミー画像符号を生成することを特徴とする請求項1記載の画像符号化装置。

【請求項5】 前記符号化手段は、符号化により、符号化対象の符号の前方にライン数定義パラメータを、後方にライン数再定義パラメータを形成し、

前記第1の符号のライン数定義パラメータには、仮のライン数を指定し、

前記第2の符号のライン数再定義パラメータには、第1と第2の回転画像情報をマージした画像情報のライン数を指定することを特徴とする請求項1記載の画像符号化装置。

【請求項6】 前記符号化手段は、符号化により、符号化対象の符号の前方にライン数定義パラメータを、後方にライン数再定義パラメータを形成し、

前記第1の符号のライン数定義パラメータには、第1と第2の回転画像情報をマージした画像情報のライン数を入れ、ライン数再定義パラメータには第1の回転画像情報のライン数を入れることを特徴とする請求項1記載の画像符号化装置。

【請求項7】 前記第2の画像は、発信元情報をビットマップに展開した画像であることを特徴とする請求項1記載の画像符号化装置。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】 本発明は、符号化方式にIT

2

U-T標準のJPEGを採用したカラーファクシミリ、および、カラーファクシミリ送信機能を持つコンテンツ配信サービスに関する。

【0002】

【従来の技術】 一般に、ファクシミリ通信には必要な情報を緊急かつ迅速に伝え入手できるという利点があり、この利点を生かすために入手した情報がどの時点での情報かを示す発信元情報を送信原稿に付加することが行われている。

【0003】 シートフィードスキャナで、かつ画像全体を格納するメモリを持たないファクシミリは、原稿を読み込んで画像データを作成するのと、送信する時刻が同時であるため、符号化する前に画像に発信元情報を付加し、その後画像データと発信元情報とを一体として符号化を行い送信している。

【0004】 ところが、時刻指定送信やリダイヤル送信、あるいはコンテンツ配信サービスなど、画像データを一旦メモリに蓄えておき後で送信する必要がある場合がある。この送信方法を「メモリ送信」と呼ぶことにする。メモリ送信のやり方には、以下の4つの方法が考えられる。

【0005】 (方法1) 読取った画像データを、符号化(圧縮)を行わずにそのままメモリに蓄積しておき、メモリ送信を実際に行う時に発信元情報を付加し、その後画像データと発信元情報とを一体として符号化を行い送信する方法。

【0006】 (方法2) 読取った画像データを、予め符号化してメモリに蓄積しておき、実際のメモリ送信を開始する際にメモリに蓄積されている符号化データを一旦復号して元のデータに戻し、その復元データの先頭に発信元情報を付加し、再び符号化をして送信する方法。

【0007】 (方法3) 送信側において、画像データを読取った際に、読取ったデータに発信元情報を直ちに付加し、その後に圧縮を行ってメモリに蓄積し、送信を行う方法。

【0008】 (方法4) 読取った画像データを予め符号化してメモリに蓄積しておき、実際のメモリ送信を開始する際に発信元情報も符号化し、2つの符号をマージして送信する方法。

【0009】 しかしながら、上記方法1、2、及び3については、以下のような問題がある。

(方法1)の問題：非圧縮の画像データを一旦格納するための大容量のメモリが必要になってしまう。

(方法2)の問題：符号化、復号を行うことにより、処理に時間がかかってしまう。

(方法3)の問題：画像の読取り時点で付加された発信元情報のうちの送信時刻情報は過去のものとなり、正確な送信時刻の情報の送信ができない。

【0010】 これに対して、(方法4)の読み取り画像データの符号と発信元の符号をマージする方法は、上記

(3)

3

の3つの方法の問題を回避できる。ただし、画像データと発信元は独立に符号化されるため、後で送信される画像を符号化するときに、先に送信される画像との相関を利用することはできない。従って、(方法4)で利用できる符号化には制限がある。

【0011】ちなみに、モノクロ送信の符号化方式としては、MH (Modified Huffman)、MR (Modified Read)、MMR (Modified Modified Read)、JBIG (Joint Bi-level Image Group) がある。

【0012】MHは、1ラインごとにライン中の白ランと黒ランのランレングスをハフマン符号で符号化し、1ライン分の符号の終わりにライン同期信号EOLを付加する符号化方式である。

【0013】MRは、MHを改良したもので、圧縮率を上げるために前のラインとの相関を利用して符号化を行う符号化方式である。1ライン目はMHで符号化するが、2ライン目からKライン目までは直前のラインとの相関を利用して符号化する。再びK+1ライン目はMHで符号化し、同様のことを繰り返す。この数Kを「Kパラメータ」と呼んでいる。また、MRにもライン同期信号EOLがある。

【0014】MHは1ラインごと、MRはKラインごとに前のラインとの相関がなくなるため、画像の一部を独立に符号化・復号できる。この機能は、元々はエラー訂正のない回線での使用を想定したもので、伝送誤りがあっても画像全体には普及せず、復号した画像の一部が乱れるだけですむ。

【0015】これに対し、MMRは $K=\infty$ のMRに相当し、JBIGはマルコフモデル符号化なので、符号化のために参照画素が必要である。従って、MMRとJBIGは画像の一部を独立に符号化・復号することはできない。そのため、これらでは誤り再送機能 (ECM: Error Correction Mode) が必須となっている。

【0016】以上のことから、モノクロ送信の符号化で、(方法4)によってメモリ送信での発信元情報の付加を実現できるのは、MHとMRである。

【0017】ところで、カラーファクシミリでは、JPEG (Photographic Picture Experts Group) が標準の符号化方式として採用されている。カラーファクシミリといっても勧告上はモノクロファクシミリと変わらず、JPEGもオプションの符号化方式の一つである。JPEGでは、DC成分、AC成分の順に符号化するが、DC成分は直前の画素ブロックのものと相関が強いので、その差分を符号化する。ただし、伝送誤りによる画像の乱れの伝搬停止やランダムアクセスのためにDC成分を初期化するリスタートマーカが用意されている。

【0018】JPEGにおいても、リスタートマーカを画像の右端ブロックの直後にいれることにすれば、画像を上下に分断することができ、モノクロのMHやMRと同様に符号どうしのマージを行うことができる。

4

【0019】以上のことから、カラーファクシミリのメモリ送信時の発信元付加には、リスタートマーカを使用したJPEGを用いることが考えられる。このことは、特開平11-313210号公報にも開示されている。

【0020】

【発明が解決しようとする課題】しかしながら、リスタートマーカを利用して、画像の先端に発信元を付けるのは符号化効率が低下するという問題がある。以下では、この問題が発生する理由を説明するために、JPEGのアルゴリズムとJPEGデータのフォーマットを説明する。

【0021】カラー画像は成分が3つあり、それぞれが階調を持つため、同じサイズの白黒2値画像と比べてデータ量が多い。例えば、256階調のカラー画像は、白黒2値画像と比べて24 ($=3 \times 8$) 倍のデータ量になる。そのため、送信にあたって効率的な圧縮が望まれる。

【0022】カラーの自然画像の圧縮方式として最も普及しているJPEGは、デジタルカメラ、パソコン、インターネットなど、多くのアプリケーションで使用されている。カラーファクシミリにおいても、JPEGが標準の符号化方式に用いられている。ただし、他のアプリケーションでは、色空間にはRGBから線形変換できるYCbCrが用いられているのに対して、カラーファクシミリではCIELABが用いられている。また、ファクシミリでは原稿はシートフィードのスキナで入力され、予め画像のライン数がわからない場合があるので、ライン数の情報を圧縮データの終わりに入れることが認められている。

【0023】JPEGという名称は、元々はISOとCCITT (ITU-Tの旧称) が共同で静止画像の符号化を制定するために作ったグループJoint Photographic Experts Groupの略称であるが、現在では、主にこのグループが制定した符号化方式および符号化されたファイル形式を指すのに使われている。

【0024】JPEGアルゴリズムには、いくつかのモードがあるが、カラーファクシミリで採用されているのは、他の多くのアプリケーションと同様にJPEGベースラインと呼ばれるものである。

【0025】図6は、JPEGベースラインの符号化および復号のアルゴリズムを示す概略図である。以下、図2に基づいてJPEGベースラインの符号化および復号のアルゴリズムの概略とそれぞれのブロックの機能を説明する。

【0026】符号化側では、まず、色変換されたあとの原画像の原画像データ (CIELAB) 601に対して、サブサンプリング部602にてサブサンプリング処理を行う。次に、DCT変換部603にて輝度、色差の 8×8 の各ブロックに対して、DCT変換を行う。次に、量子化部604にて前記DCT変換部603にて求

50

(4)

5

められたDCT係数に対して、量子化を行い、量子化された値のDC成分、AC成分に対してハフマン符号化部605にてハフマン符号を割り当てる。そして、JPEGデータには圧縮データの他に、量子化テーブルT1、ハフマンテーブルT2を作成する情報などの復号に必要なパラメータが含まれる。よって、制御コード付加部606にて、圧縮データに量子化部604とハフマン符号化部605にて使用した量子化テーブルT1とハフマンテーブルT2の各パラメータを付加して、送信するJPEGデータ607を作成する。

【0027】復号側では基本的には符号化の逆を行えばよい。まず、制御コード付加部606bにて、JPEGデータ607から量子化テーブルT1、ハフマンテーブルT2などのパラメータを取りだし、圧縮データの復号の準備をする。次に、ハフマン復号部605b、逆量子化部604b、逆DCT変換部603b、及び補間処理部608の順に、パラメータに基づき、ハフマンの復号処理、逆量子化処理、逆DCT変換処理、補間処理を行って復号画像601bを得る。尚、JPEGでは量子化によって情報が欠落するため、復号画像が原画像と一致しない。これは非可逆符号化と呼ばれる。

【0028】また、JPEGはいったんデータが壊れると、復旧することができないため、ファクシミリで送受*

$$f(x, y) = P(x, y) - 128$$

$$F(u, v) = \frac{1}{4} \{C(u)C(v)\} \sum_{x=0}^7 \sum_{y=0}^7 \left[f(x, y) \cos \left\{ \frac{(2x+1)u\pi}{16} \right\} \cos \left\{ \frac{(2y+1)v\pi}{16} \right\} \right] \\ (u, v, x, y = 0 \sim 7)$$

$$c(0) = \frac{1}{\sqrt{2}}$$

$$c(n) = 1 \quad (n \neq 0)$$

【0032】量子化部604での量子化処理は、量子化前のDCT係数をF(u, v)、量子化テーブルT1をQ(u, v)、量子化後の係数をG(u, v)とすると、次式で表される。

$$G(u, v) = [F(u, v) / Q(u, v)] \\ (u, v = 0 \sim 7)$$

ここで、[]は四捨五入を表す。

【0033】量子化テーブルQ(u, v)は、色成分L*、a*、b*ごとに違うテーブルを用いることができるが、一般には、輝度用に1つ、色差用に1つを用いることが多い。通常は高周波ほどテーブルの値を大きくして、粗く量子化する。これは、人間の目は高周波ほど感度が悪いので、そこを粗く量子化しても、ほとんど画質の劣化がわからないためである。ただし、画像の見え方は、画像の大きさ、見る距離、解像度などによって変わってくるので、アプリケーションによって最適なテーブルは違ってくる。

【0034】ハフマン符号化部605における量子化後

6

* 信するときは、ECM（誤り再送）が必須となっている。

【0029】サブサンプリング部602にてサブサンプリングを行う理由は、人間の目が空間的な輝度の変化と比べて、色差の変化には鈍感であるためである。そのため、輝度の解像度はそのまま、色差の解像度だけを間引く。この処理だけでも、圧縮になるが、後述するDCT変換のブロック数が減るため、演算量が減るというメリットもある。カラーファクシミリでは、色差a*、b*は4画素の平均をとって、解像度を縦横とも2分の1にする4:1:1のサブサンプリングが基本である。このとき、輝度L*のブロック4つに、a*、b*のブロック1つずつが対応している。

【0030】DCT変換部603でのDCT変換は、直交変換の一種で、図7のように原画像の1成分の8×8のブロックP(x, y)に対して、8×8の変換係数ブロックF(u, v)が出力される。変換係数ブロックF(u, v)の左上のF(0, 0)はDC成分で、それ以外の係数はAC成分を表している。JPEGベースラインの8ビットモードでの具体的な変換式は、以下で表される。

【0031】

【数1】

のDCT係数への符号割り当てでは、DC成分には、前のブロックとの相関が強いので、図8のように前のブロックとの差分に対してハフマン符号を割り当てる。AC成分は、図9に示すように斜め方向にジグザグにスキャンし、図10のフローチャートに示す以下の手順で符号化される。

(1) AC成分を図9に示すように、ジグザグスキャンする(ステップS1)。

(2) 注目する成分が0でなければ、グループ分けする(ステップS2, S3)。

(3) 注目する成分が0ならば、そのランレングスをカウントする(ステップS2, S4)。

(4) ジグザグの最後まで0なら打ち切る。

【0035】量子化後のAC成分は、高周波ほど大きな値で割られていて0に収束することが多いため、

(3)、(4)の処理によって大幅な符号量の削減が図れる。

【0036】また、最適なハフマン符号は画像や量子化

7

テーブルT1によって異なるため、J P E GではハフマンテーブルT2を選択できるようになっている（ステップS5）。

【0037】以上は、J P E Gのアルゴリズムの説明であるが、符号化されたデータが異なる環境で確実に復号されるためには、前記したように符号化アルゴリズムに基づいて作成された圧縮データの他に各種パラメータを共通のフォーマットで送信する必要がある。そこで、J P E G規格では、符号化データの交換フォーマットが定められている。以下では、図11を基にJ P E Gデータの交換フォーマットのデータ構造を説明する。

【0038】J P E Gデータを便宜的に大きく3つに分け、それぞれを、先頭マーカコード部T M、画像情報部I I、終端マーカコード部E Mと称することとする。

【0039】先頭マーカコード部T Mの先頭は、必ず領域S O Iで始まり、その後には復号のための各種パラメータが含まれる領域であるマーカ一群Mがある。前記マーカ一群Mは、図12に示すように、マーカセグメントA P P 1、C O M、D H T、D Q T、S O F 0、D R I、及びS O Sなどで構成される。

【0040】前記マーカセグメントA P P 1は、カラーファクシミリのために導入されたもので、ファックス識別子と解像度情報が含まれる。前記マーカセグメントC O Mは、製品名などのコメントを入れるもので、圧縮には何の効果も及ぼさない。前記マーカセグメントD H TはハフマンテーブルT2の生成情報、マーカセグメントD Q Tは量子化テーブルT1が含まれる。前記マーカセグメントS O F 0は、J P E Gベースライン用のフレームヘッダで、画像のライン数、画像幅が含まれている。前記マーカセグメントS O Sは、必ず圧縮データの直前にあるが、マーカセグメントS O F 0、D H T、及びD Q Tの位置は領域S O IとマーカセグメントS O Sの間にあればよい。また、マーカセグメントD H T、D Q Tは1つのマーカセグメントにすべてのテーブルを入れてもよく、1つのテーブルしか入れない代わりに複数のマーカセグメントを使ってもよい。各色成分がどのテーブルを使うかの情報は、マーカセグメントS O Sに含まれる。なお、マーカセグメントD R Iは、後述するリスタートマーカR Mの間隔であるリスタートインターバル値を格納している。これらについては、後で説明する。

【0041】終端マーカコード部E Mは、マーカセグメントD N LとE O Iからなる。前記マーカセグメントD N Lは、ライン数を指定するN Lパラメータを持つ。前記D N Lは、符号化側に画像全体を格納するメモリが無く、符号化の時点でライン数を確定できない場合を想定したもので、圧縮後に画像のライン数を指定する場合に用いられる。このとき、前記マーカセグメントS O F 0に格納されているライン数は仮のライン数となり、マーカセグメントD N LのN Lパラメータが本当

(5)

8

のライン数になる。ただし、ライン数 $Y > N L$ または、 $Y = 0$ でなければならない。

【0042】カラーファクシミリでは、マーカセグメントD N Lでライン数を指定したJ P E Gも復号できない。マーカセグメントD N Lの使用はJ P E Gの規格にあるが、他のアプリケーションでは見られず、ファクシミリ特有のものになっている。

【0043】画像情報部I Iは、図11のように圧縮データC DとリスタートマーカR Mからなる。J P E Gでは、1つの色成分に対し1つの単位を符号化した後に、次の色成分の1つの単位を符号化する。繰り返す単位をM C Uという。サブサンプリング4:1:1のときは、輝度成分4ブロックに対して、2つの色差成分は1ブロックずつが対応し、これがM C Uとなる。

【0044】J P E G規格ではリスタートマーカR Mを使用する時には、リスタートマーカR MはM C Uを単位とする間隔で挿入されることになっており、その間隔はリスタートインターバルと呼ばれ、先頭マーカコード部T MのマーカセグメントD R Iで指定される。

【0045】ところで、カラーファクシミリでは、以上に説明したJ P E Gが標準の符号化方式として採用されているのであるが、メモリ送信における符号化後に発信元を付加するに当たってリスタートマーカR Mを使用するのは、以下の問題がある。

【0046】D C成分の値は、ブロック中の画素の合計値に相当するので、画像の場所によって値が変わるが、D C成分の差分の値は、0付近に集まる性質がある。そのため、値が小さい差分に短い符号を割り当てることにより、符号化効率を上げることができる。ところが、リスタートマーカR Mの直後ではD C成分の差分でなく、D C成分そのものの値に符号が割り当てられる。従って、リスタートマーカR Mが多いほど、符号化効率が低下することとなる。

【0047】発信元情報の文字は、200dpiならば32ライン程度で表せる。1ブロックは8×8だから、サブサンプリング4:1:1では、16×16の画素が1M C Uになるので、幅1728画素であるA4サイズの画像に付される発信元情報は、216(=1728/16×32/16)個のM C Uからなる。従って、発信元情報を符号化後に付けるには、リスタートマーカR Mを入れる間隔は216にすればよい。ところが、J P E G規格ではリスタートマーカR Mの挿入の間隔は一定にしかできないため、発信元情報を画像の先端に付加する場合は、マージする箇所は発信元情報と画像の接続部の1カ所であるにも関わらず、画像データ内の本来必要のない箇所にも同じ間隔でリスタートマーカR Mを入れなければならない。従って、圧縮データC Dは、発信元情報4と同じく32ラインの矩形でリスタートマーカR Mで区切られこととなり、J P E Gデータと画像とを対応して示すと図13に示すようになる。図13(a)は発信

(6)

9

元情報4を原画像1の先端に付加した画像を、(b)は(a)の画像をラインに対応して示すJPEGデータの模式図である。参照符号C1は原画像1のブロック単位の圧縮データ、C4は発信元情報4の圧縮データを示している。

【0048】リスタートマーカRMは、DC成分を初期化するため、その数が多いほどDC成分間の相関が利用できなくなり、符号化効率が低下するという問題がある。A4サイズの画像の高さは、約2300ラインであるから、1つの画像中に約71(=2300/32)ものリスタートマーカが挿入されることになり、符号化効率の低下は著しい。

【0049】本発明は、前記の問題点を解消するためになされたものであって、発信元情報を画像の先端に付加する場合に、リスタートマーカの増加を抑えて符号化効率を高めた画像符号化装置を提供することを目的とする。

【0050】

【課題を解決するための手段】本発明は、上記の目的を達成するため、次の構成を有する。本発明の第1の要旨は、第1の画像と、該第1の画像よりも小領域の第2の画像とを、各々符号化した後に結合して送信することで、1の送信画面上には第2の画像が第1の画像よりも上段側に配置する送信画像を送信する画像符号化装置であって、前記第1の画像と第2の画像を各々略180°回転した第1の回転画像と第2の回転画像を出力する画像回転手段と、前記第1の回転画像の大きさに基づく符号化ブロック単位で、前記第1の回転画像を符号化した第1の符号と、第2の回転画像を符号化した第2の符号と、を生成する符号化手段と、前記第1の符号の後方に第2の符号を結合する符号結合手段と、を設けたことを特徴とする画像符号化装置にある。

【0051】本発明の第1の要旨によれば、画像回転手段によって送信画像を略180°、すなわち、出力結果した送信画像に欠ける部分の出ない回転角度で回転することで、符号化処理方向を逆転し、第1の画像が第2の画像よりも先に符号化されることとなり、符号化手段では第1の回転画像の大きさに基づく符号化ブロック単位で第1、第2の回転画像を符号化することとなる。ここで、第2の回転画像は第1の画像よりも小さいので、第2の回転画像が複数の符号化ブロックとなることはない。第1、第2の回転画像の符号化における符号化ブロックは2個となり、符号化ブロック毎にリセットされる圧縮処理等が最低限の回数に抑えられ、符号化効率を向上することができる。

【0052】本発明の第2の要旨は、前記符号化手段は、符号化ブロック単位を示す識別符号の挿入間隔を第1の回転画像の大きさに基づいて決定することを特徴とする要旨1記載の画像符号化装置にある。

【0053】本発明の第2の要旨によれば、符号化プロ

10

ック単位を示す識別符号を設ける挿入間隔を第1の回転画像の大きさに基づいて決定することで、第1の画像よりも小さい第2の回転画像の符号中には識別符号は挿入されず、符号化効率を向上することができる。

【0054】本発明の第3の要旨は、前記符号結合手段は、符号化ブロック単位を示す識別符号により第1の符号と第2の符号を結合することを特徴とする要旨1記載の画像符号化装置にある。

【0055】本発明の第4の要旨は、前記符号化手段は、前記第1の回転画像の符号化時に、符号化ブロック単位を示す識別符号の後に前記第2の回転画像の符号で置き換えるためのダミー画像符号を生成することを特徴とする要旨1記載の画像符号化装置にある。

【0056】本発明の第5の要旨は、前記符号化手段は、符号化により、符号化対象の符号の前方にライン数定義パラメータを、後方にライン数再定義パラメータを形成し、前記第1の符号のライン数定義パラメータには、仮のライン数を指定し、前記第2の符号のライン数再定義パラメータには、第1と第2の回転画像情報をマージした画像情報のライン数を指定することを特徴とする要旨1記載の画像符号化装置にある。

【0057】本発明の第6の要旨は、前記符号化手段は、符号化により、符号化対象の符号の前方にライン数定義パラメータを、後方にライン数再定義パラメータを形成し、前記第1の符号のライン数定義パラメータには、第1と第2の回転画像情報をマージした画像情報のライン数を入れ、ライン数再定義パラメータには第1の回転画像情報のライン数を入れることを特徴とする要旨1記載の画像符号化装置にある。

【0058】本発明の第3～6の要旨によれば、第1の符号と第2の符号の結合を確実に行うことができる。

【0059】本発明の第7の要旨は、前記第2の画像は、発信元情報をビットマップに展開した画像であることを特徴とする要旨1記載の画像符号化装置にある。本発明の第7の要旨によれば、ファクシミリ等で広く用いられている文字、数字、記号、符号等からなる第2の画像である発信元情報を、第1の画像の上段部に向きを同じくして配置できるので、受信者は見やすく発信元情報が付いた送信画像を得ることができる。

【0060】

【発明の実施の形態】以下、図面を参照して本発明の実施形態を詳細に説明する。尚、前記した構成と同一部分には同一符号を付して説明を省略する。

【0061】図1は、本発明の実施形態に係る画像符号化装置の符号化部の概略構成を表すブロック図である。本発明の実施形態に係る画像符号化装置は、送信したい原画像1を入力する画像入力手段2、発信元情報をビットマップに展開した発信元画像4を作成する発信元作成手段3、入力された画像を180°回転して、回転画像を出力する画像回転手段5、画像回転手段5より出力さ

(7)

11

れた画像を一時的に格納する画像用メモリ7、回転画像を符号化する符号化手段9、符号化手段9より出力された符号を格納する符号用メモリ10、11、2つの符号を結合する符号結合手段13を有している。

【0062】また、図1中の参照符号1と6は、それぞれ送信した画像1とそれを回転した回転画像6を表す模式図で、参照符号4と8は、それぞれ発信元情報をビットマップに落とした発信元画像4と、それを回転した回転発信元画像8を表す模式図である。参照符号12は、2つの符号をマージした送信画像12を表す模式図で、復号し、印字したときに、この図が再現される。図中の点線は、図とそれに対応する画像データまたは符号を表す。

【0063】画像入力手段2は、送信したい画像データを作成するもので、図示しないスキャナにより画像が印字されている原稿からデジタル画像データを作成してもよく、すでにあるデジタル画像データを加工して作成してもよい。

【0064】発信元作成手段3は、フォントで表された送信者の氏名や送信時刻などの発信元情報をビットマップに展開して、画像データ4を作成する。

【0065】画像回転手段5は、入力画像データの向きを180°回転処理するのであり、画像入力手段2から出力された画像データと発信元作成手段3から出力された画像データ4を180°回転、すなわち符号化方向を逆にして、画像用メモリ7に出力する。尚、本実施形態では回転方向を180°として説明するが、入力画像データの向きを略上下反転する角度であればよい。すなわち、回転した画像データを復号した場合に、出力結果した送信画像に欠ける部分のない回転角度であればよい。係る画像データが欠けることのない回転角度を、「略180°」と称する。従って、略180°は、出力する用紙に対する送信画像の大きさ、配列関係等によって異なることとなる。

【0066】画像用メモリ7には、入力画像1の向きを180°回転された画像が格納され、符号化手段9は、該180°回転された画像を符号化する。

【0067】符号用メモリ10、11は、それぞれ回転され符号化された画像データと発信元情報の画像データを格納する。

【0068】画像結合手段13は、二つの符号をマージし、通信回線14へ出力する。

【0069】符号化手段9による符号化と、画像結合手段13による符号のマージの仕方は、いくつか考えられるが、共通の特徴を以下に説明する。

【0070】(a) 画像サイズについて
入力画像のライン数をY1、発信元のライン数をHとする。ここで、Y1とHはサブサンプリング4:1:1のときは16の倍数、サブサンプリング1:1:1のときは8の倍数になるようにする。

12

【0071】(b) リスタートインターバルについて
マーカーセグメントDRIのリスタートインターバルの大きさは、画像幅Xとライン数Y1から決まる。サブサンプリング4:1:1のときは $(X/16) * (Y1/16)$ になり、サブサンプリング1:1:1のときは、 $(X/8) * (Y1/8)$ になる。

【0072】次に、符号化と符号のマージの方法の実施例1〜3について説明する。

(実施例1) 符号化と符号のマージの方法の実施例1

10 は、画像データに予めダミーデータを入れておき、全体を符号化したあと発信元の符号とダミーデータ部分を取り替える方法である。以下、図2を参照しつつ、詳細に説明する。

【0073】入力画像1の符号化に関して、先端マーカーコード部TM内のマーカーセグメントSOF0 (図12参照) のYパラメータ (ライン数) には画像の本当のライン数Y1+Hを入れ、回転後の回転入力画像6の下にライン数Hで発信元画像4と大きさが同じになるダミーデータDDを付けて、画像全体をJPEGで符号化する。

20 【0074】リスタートマーカーRMは、上記マーカーセグメントDRI (図12参照) に記述してあるリスタートインターバル値により、回転後の回転入力画像6に対する圧縮データC6とダミーデータDDに対する圧縮データCDDの間に挿入される。この符号は、符号用メモリ10に蓄えられる。

【0075】一方、回転後の回転発信元画像8は、前記回転入力画像6とは別にJPEGで符号化し、符号メモリ11に蓄えておく。

30 【0076】送信に当たっては、符号用メモリ10にある符号データの先端マーカーコード部TMと回転入力画像6に対する圧縮データC6とリスタートマーカーRMまでを送信した後、回転発信元画像8に対する圧縮データC8と終端マーカーコード部EMを送信する。これにより、送信される符号は、回転発信元画像8のついた一つの送信画像12に対応したものになり、復号するとそれが得られる。

【0077】(実施例2) 符号化と符号のマージの方法の実施例2は、Yパラメータには仮のライン数(Y0)を入れておき、回転発信元画像8とのマージの時に、終端マーカーコード部EMのマーカーセグメントDNL (図11参照) で本当のライン数を指定するものである。以下、図3を参照しつつ、詳細に説明する。

40 【0078】入力画像1の符号化に関して、先端マーカーコード部TM内のマーカーセグメントSOF0 (図12参照) のYパラメータには画像の仮のライン数Y0を入れる。ここで、Y0はY0=0またはY0>Y1+Hにする。ここでは、前記実施例1で示したダミーデータDD (図2) は付けずに、回転された入力画像6のみをJPEGで符号化する。上記のマーカーセグメントDRI

50

(8)

13

(図12参照)に設定されたリスタートインターバルにより、リスタートマーカRMは圧縮データC6の後に付き、その後には終端マーカコード部EMが付く。該終端コード部EMにマーカセグメントDNLを入れ、パラメータNL=Y1(本当のライン数)とする。

【0079】一方、回転後の発信元画像8は、回転入力画像6とは別にJPEGで符号化し、符号メモリ11に蓄えておく。ここで、先端マーカコード部TM内のマーカセグメントSOF0(図12参照)のY=H、終端コード部EMのマーカセグメントDNLのパラメータNL=Y1+Hとする。

【0080】送信に当たっては、符号用メモリ10にある符号データの先端マーカコード部TMと回転入力画像6に対する圧縮データC6とリスタートマーカRMまでを送信した後、回転発信元情報画像8に対する圧縮データC8と終端マーカコード部EMを送信する。

【0081】(実施例3)符号化と符号のマージの方法の実施例3は、Yパラメータには送信される画像の本当のライン数を入れておき、DNLで発信元情報画像がないときの画像の本当のライン数を指定するものである。以下、図4を参照しつつ、詳細に説明する。

【0082】入力画像1の符号化に関して、先端マーカコード部TM内のSOF0のYパラメータには画像の本当のライン数Y1+Hを入れる。ここでは、ダミーデータは付けずに、終端マーカコード部EMにマーカセグメントDNLを使い、NL=Y1として、回転された入力画像6のみをJPEGで符号化する。

【0083】マーカセグメントDRIのリスタートインターバルにより、リスタートマーカRMは回転入力画像6の圧縮データC6の後に付き、その後には終端マーカコード部EMが付く。終端マーカコード部EMにDNLを入れ、NL=Y1とする。

【0084】一方、向きを180度回転後の発信元情報画像8は、回転入力画像6とは別に符号化し、符号用メモリ11に蓄えておく。

【0085】送信に当たっては、符号用メモリ10にある符号データの先端マーカコード部TMと回転入力画像6に対する圧縮データC6とリスタートマーカRMまでを送信した後、回転発信元情報画像8に対する圧縮データC8とその終端マーカコード部EMを送信する。

【0086】上記3つの方法において、実施例1、3に示す方法、手段では、回転発信元情報画像8の符号化の前に、送信する画像のライン数が分かっていないと使えないが、実施例2の方法、手段では、送信前になって初めて、回転発信元情報画像8のライン数Hが確定したときでも使うことができる。いずれも、符号化メモリ10に格納された符号は回転発信元情報画像8の符号C8がないだけで正常の画像に復号することができる。これにより、符号化メモリ10に格納された符号を送信すれば、発信元情報画像8のついていない画像に対する符号

14

も送信することができる。ただし、符号化メモリ11に格納された回転発信元情報画像8の符号は、実施例2のときだけは、Y<NLとなっているため正しく復号できない可能性がある。

【0087】上記第1～第3の方法、手段により、図1、図5のように送信される符号は、回転発信元情報画像8の付いた一つの送信画像12に対応したものになり、復号するとそれが得られる。いずれも、リスタートマーカRMは一つしか使わない。

【0088】以上説明したように、別個独立の入力画像1と発信元情報画像4とを組み込み、1の送信画像を形成する場合に、該送信画像の上方部に少ないライン数(小さな領域)の発信元情報画像4を、その下方部に発信元情報画像4よりも大きな領域の入力画像1を配置する時には、入力画像1と発信元情報画像4とを符号化前に各々180度回転し、大きな領域の入力画像1側よりJPEGで符号化を開始することで、符号化ブロック単位が入力画像1により決定され、リスタートマーカRMは回転入力画像4の符号と回転発信元情報画像8の符号の間の1箇所のみ挿入されるのみとなる。

【0089】一方、入力画像1と発信元情報画像4とを符号化前に各々180度回転することなく符号化した場合には、少ないライン数の発信元情報画像4の領域に合せて大きな領域の入力画像1の符号中にリスタートマーカRMが多数含まれることとなる。従って、上記した本実施形態に係る画像符号化装置によれば、入力画像1の符号中にリスタートマーカRMが含まれることはないの、符号化効率を高めることができる。

【0090】

【発明の効果】以上説明した通り、本発明の要旨によれば、メモリ送信時に第2の画像として例えば、発信元情報を付ける場合において、大きな第1の画像は1の符号化ブロックとなるので、例えば送信されるJPEG符号につけられる識別符号となるリスタートマーカは、第1の符号と第2の符号の間に1つだけですむため、従来の技術のリスタートマーカを多数使用する場合と比べて、符号化効率はかなり改善される。

【0091】また、カラーファクシミリでは、インクジェットプリンタが使われることが多く、紙は普通紙が使われる。画像は一枚の紙に印字されるので、逆さまに送信してもユーザーが見るときに直せばよいので、不自然さはない。逆に、紙は前から出てくるので、ユーザーにとって正しい方向に画像が印刷されて紙が出てくるというメリットがある。

【図面の簡単な説明】

【図1】本発明の実施形態に係る画像符号化装置の概略構成を示すブロック図である。

【図2】本発明の実施例1に係る符号化と符号のマージの説明図である。

【図3】本発明の実施例2に係る符号化と符号のマージ

50

(9)

15

の説明図である。

【図4】本発明の実施例3に係る符号化と符号のマージの説明図である。

【図5】本発明の実施形態に係る画像符号化装置による反転した画像とその送信情報の説明図である。

【図6】J P E Gの符号化、復号を説明する概略ブロック図である。

【図7】D C T変換の説明図である。

【図8】D C成分の符号化方法の説明図である。

【図9】ジグザグスキャンの説明図である。

【図10】A C成分の符号化方法を説明するブロック図である。

【図11】J P E Gデータの交換フォーマットの説明図である。

【図12】マーカー群に含まれる具体的なマーカーセグメントの説明図である。

【図13】従来の画像符号化装置による送信画像とその

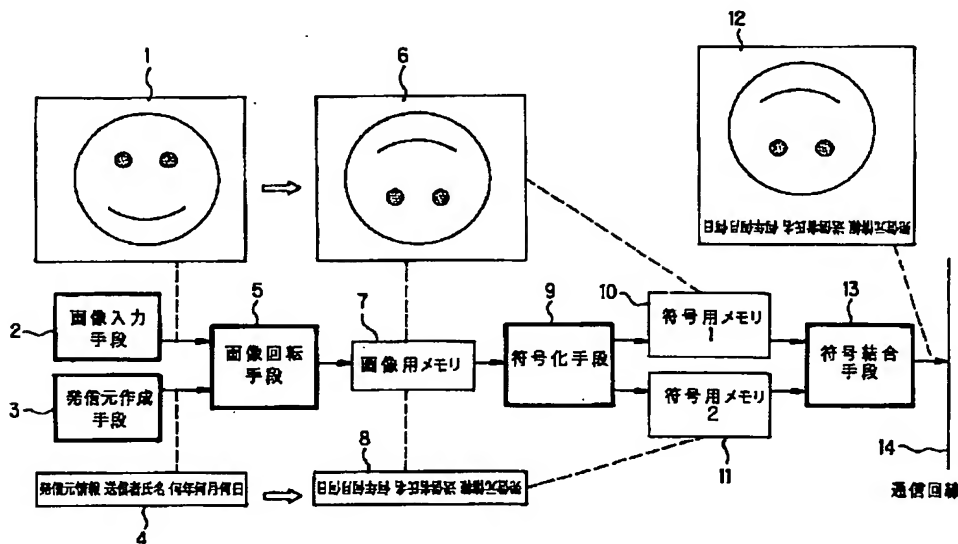
16

送信情報の説明図である。

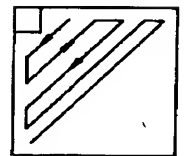
【符号の説明】

- 1 原画像
- 2 画像入力手段
- 3 発信元作成手段
- 4 発信元情報画像
- 5 画像回転手段
- 6 回転入力画像
- 8 回転発信元情報画像
- 10 12 送信画像
- 13 符号結合手段
- TM 先頭マーカー部
- RM リスタートマーカー部
- EM 終端マーカーコード部
- DD ダミーデータ
- Y1、H ライン数

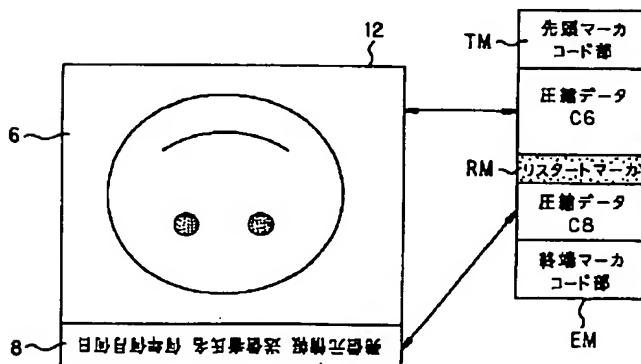
【図1】



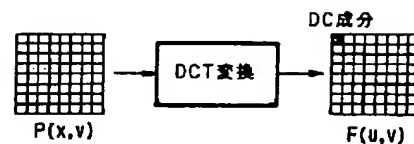
【図9】



【図5】

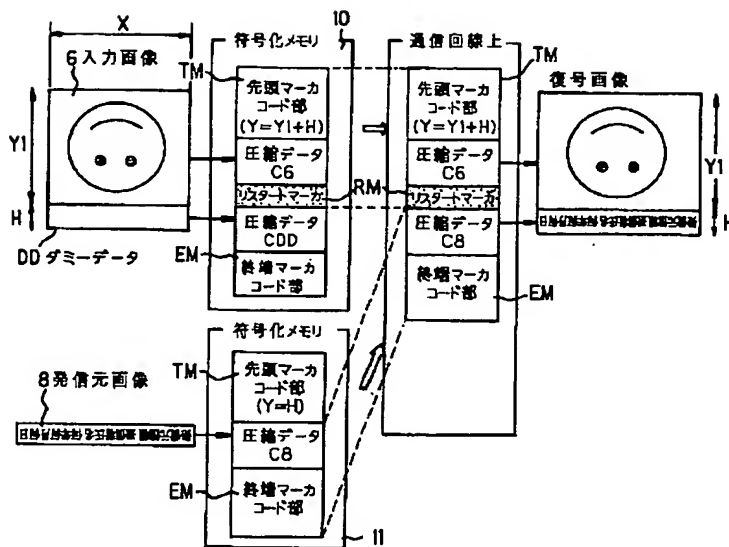


【図7】

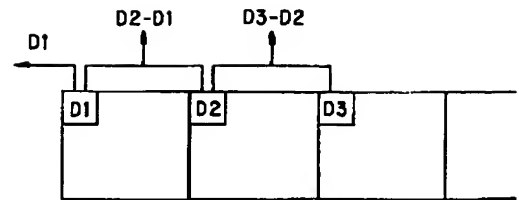


(10)

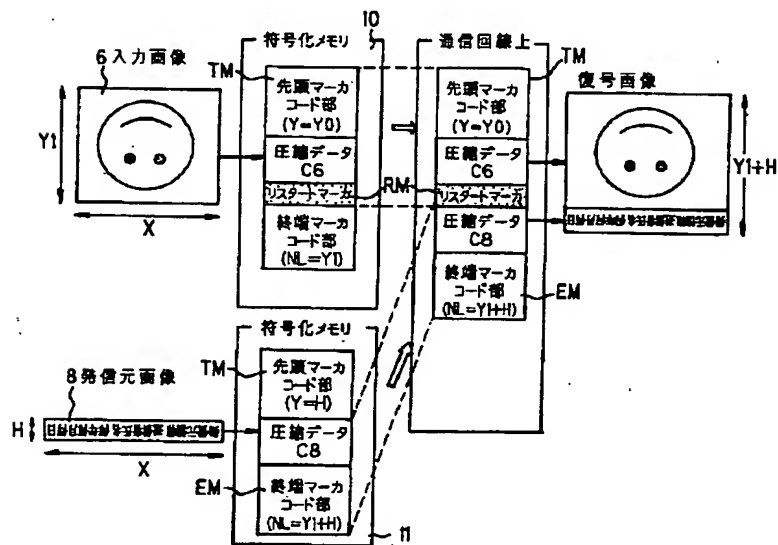
【図 2】



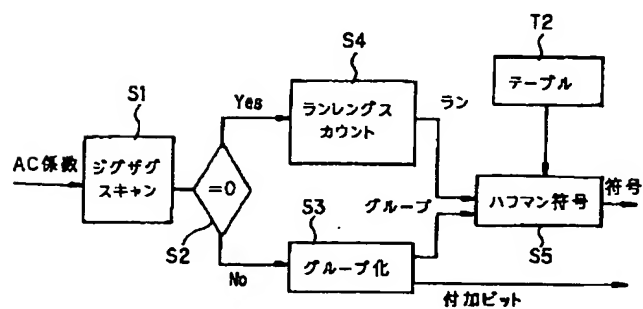
【圖 8】



【図 3】

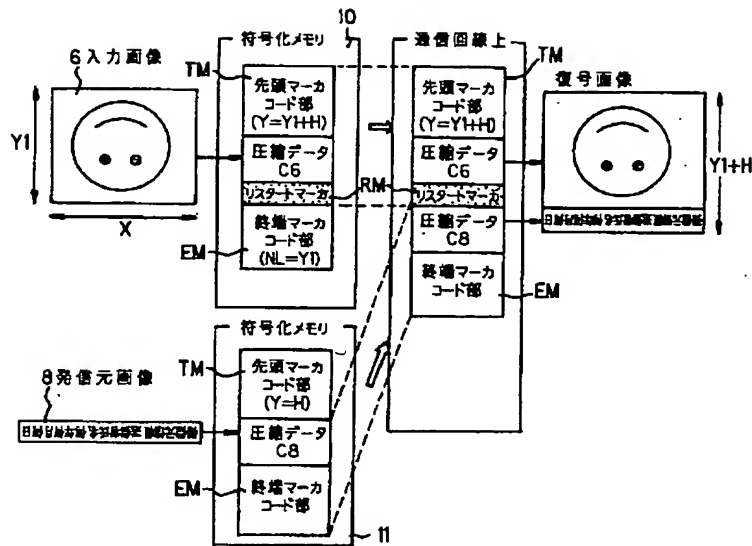


【図 10】

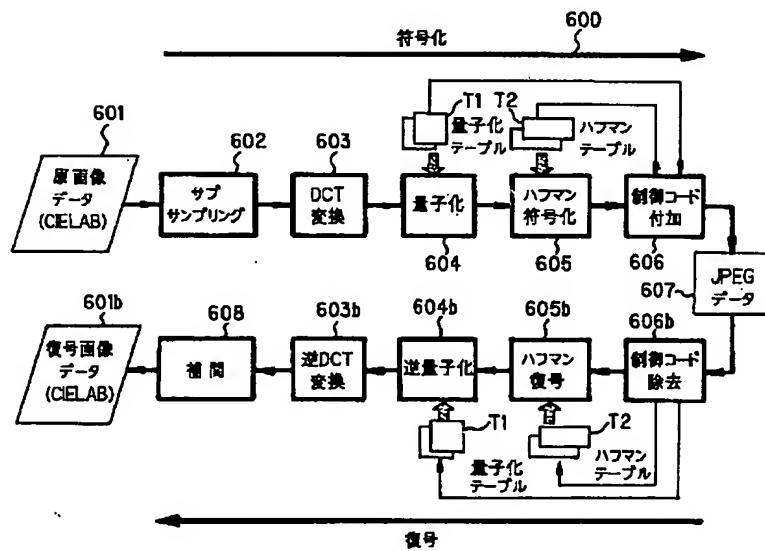


(11)

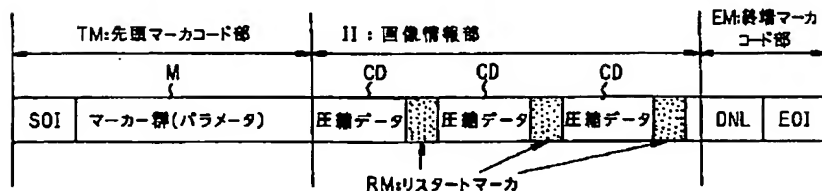
【図 4】



【図 6】

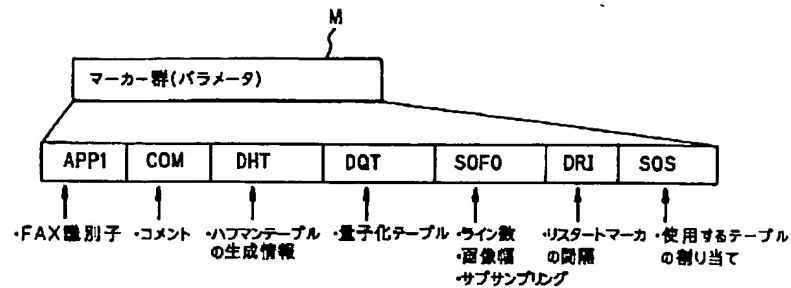


【図 11】

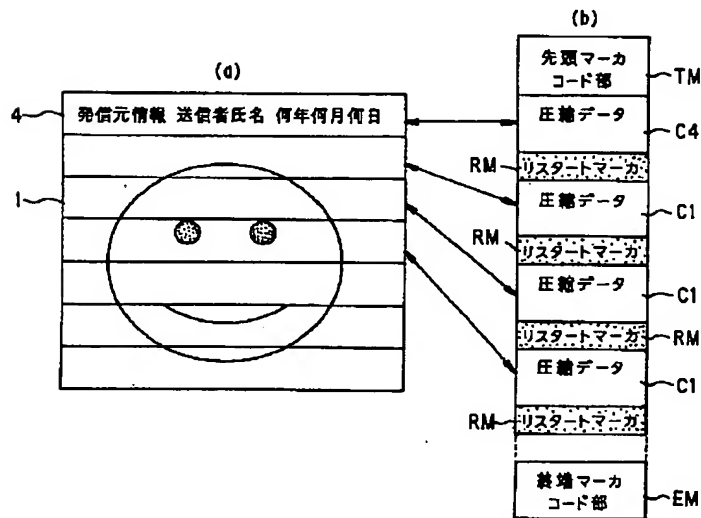


(12)

【図12】



【図13】



フロントページの続き

(51) Int. Cl. 7

H 0 4 N 7/30

識別記号

F I

H 0 4 N 7/133

テーマコード (参考)

Z

Fターム (参考) 5B057 AA11 CA01 CA08 CA12 CA16
 CB01 CB08 CB12 CB16 CC01
 CD04 CE08 CG01
 5C059 KK08 KK38 LB05 MA00 MA23
 MA32 MC11 MC38 ME02 PP01
 PP16 PP20 RC09 RC11 RC22
 RC30 UA02 UA05
 5C076 AA14 AA16 AA24 BA06 BA08
 BA09 CA02
 5C078 AA09 BA22 BA44 BA57 CA14
 DA01 DA02 DA05 DB16 DB18
 5J064 AA02 BA15 BB13 BC02 BD02